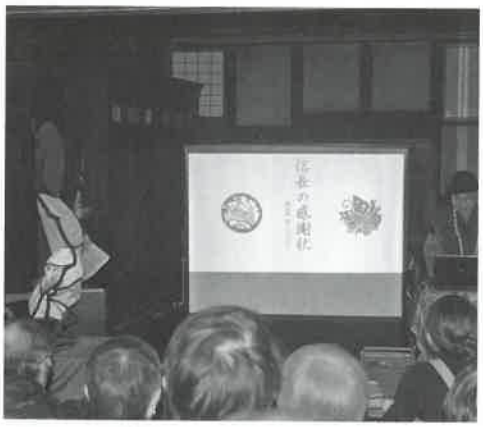
重要文化財門脇家住宅 秋の一般公開

重要文化財門脇家住宅秋季一般公開が11月3日から5日まで行われました。

公開初日の3日には、米子市在住で活躍するゴロ画伯（松村宏さん）による創作紙芝居「信長の感謝状～戦国門脇ものがたり～」が披露されました。『大山町誌』に掲載されている一節を元に、戦国を生き抜いた門脇一族の物語をゴロ画伯の独特な切り口で表現され、ピアノ伴奏（門脇めいこさん）で臨場感満点に演じられました。

他にも、『朝妻縁起』に登場する玉清姫のお話や、大山寺の開祖である金蓮上人のお話など、地域にまつわる楽しい物語を楽しみました。



▲エレキ紙芝居の上演

まちのたから（33）～文化財室通信～

シリーズ「日本遺産」第7話

今回は第2章のうち、大山牛馬市とその後について紹介します。

「和牛」誕生のいしずえ

明治政府は食用牛増産のため、輸入雑種牛との交配を奨励しました。しかし、交配牛の品質が不評だったことから、鳥取県内の牛の頭数は激減し、農家の生計を圧迫しました。その状況に危機感を抱き、鳥取県では優れた和牛を復活させようと考え、大正9年に牛馬市で商われた県産牛を中心に牛の登録事業を開始しました。血統を固定した和牛は「因伯牛」として知られ、昭和初期には九州・東北をはじめとする新しい産地に多くの種牛を供給しました。昭和41年に開催された第1回全国和牛能力共進会では、県畜産試験場所有の「気高号」が一等賞に選ばれました。気高号は全国の和牛の始祖として、その子孫が全国各地に広がっています。

今年の全国和牛能力共進会では、この地域の和牛が大変優秀な成績を修めました。先人の取り組みに裏打ちされた今の取り組みが、世界に誇る「和牛」ブランドを支えているのです。

鉄道の発展と牛馬市の終焉

明治35年11月、境～御来屋間で鉄道が開通しました。人々が熱望した、山陰地域での新たな交通・輸送手段の誕生です。

大山牛馬市はこの頃、西伯と日野の畜産組合で経営されており、のちに西伯畜産組合の経営に移りました。鉄道という新たな輸送手段ができたことによって、各地の牛馬市はその沿線で開かれるようになりました。大山牛馬市の取扱いは減り、昭和12年の春を最後に、牛馬信仰に裏打ちされた大山牛馬市は終焉を迎えました。

役牛を扱う大山牛馬市が鉄道や農業手段の発展によって、その姿を消してしまうのも、時代の流れの運命だったのでしょう。博労座は現在駐車場となり、名前の中に牛馬市の面影を感じるのみになりました。

「大山供養田植」

大山供養田植とは、牛馬安全の神である大山さん（大智明権現）信仰の一つで、定期的に行われる春・秋の大山祭りとは別に、随時奇特な施主が主催して、不慮の死にあった牛馬の霊を供養し、飼育している牛馬の安全と五穀豊穣、家内安全を祈念する祭りです。広島県庄原市に伝わる「塩原の大山供養田植」は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、地元の方々によって大切に受け継がれています。

塩原の大山供養田植は現在4年に一度行われており、来年5月末に次回の開催を予定されています。田植えの代掻きを牛が行うところは、かつての機械を使わない農業を感じられる見どころの一つです。

大山周辺には、大山北麓の私たちとはまた違う大山信仰の形が今なお人々の手で伝わり、息づいています。

（人権・社会教育課　文化財室）

▲塩原の大山供養田植